

あそび

3

2020



須賀忠男のBird Note



メジロ  
よく見かける  
花の蜜が  
大好きで  
花から花へと  
飛び回る

あそ

三月集

佐藤 喜孝

クリオネ

うごく蒼うごかぬ蕾目白去る  
丘の上の塔のぼりたし告天子

くる春の柱には猫壁に孫  
春の島案外海は退屈だ  
向日葵にもうすぐ海が見ゆるはず  
風力とソーラーパネルと向日葵と  
冬の海パチンコ臺の裏側に  
地下の驛日がな鳴く鳥コロナ風邪  
クリオネのゐる硝子窓宇宙かな



埼玉

大日向幸江

子供人

少量のおでん買ひたるコンビニや  
飛行雲北に向いたり砕氷船  
凧や子供三人手を繋ぎ  
三日にはホットケーキを初食す  
友の名を思ひ出せずや返り花

東京

七郎衛門吉保

着衣始

着衣始帯に鼠の根付下げ  
真似事の茶の湯なれども淑気たつ  
双六に高飛びのありクルマ売り  
お年賀の菓子に付き添ふ干支飾  
亥から子に替へる破魔矢の初詣

東京

篠田 純子

寒紅

寒紅や義母の煙草のフィルター  
茶の花を活けて女将の餅太り  
老練も花形もゐて初句会  
愛し子とも神とも鷹を見る鷹匠  
喇叭にて火酒煽りたき早暁

東京

篠田 大佳

てのひら

駅にゐて迷子の子より初電話  
ジャケットを脱いで羽織つて昼休  
日脚伸ぶあかりの消えた会議室  
学生渾名は大佐末の冬  
てのひらにビンタのきおく春隣



石川

定梶じょう

押し買ひ

冬木中とりのこされて巣箱あり  
スコップの突きさしてある雪月夜  
二十六聖人祭のケトル沸く  
チャルメラや糠星かうも冴えかへり  
恋猫の季節押し買ひつふが来ぬ

東京

須賀 敏子

日脚伸ぶ

新富町足袋屋の暖簾日脚伸ぶ  
日脚伸ぶ新型特急秩父まで  
山茶花の垣根の奥の小児科医  
ジェット機はペンシルほどに寒椿  
初春の光の中に残る柚子

東京

田中 藤穂

去年今年

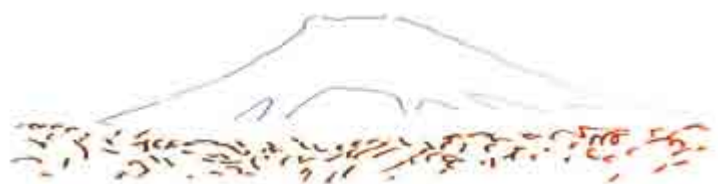
一卓で読む書く食す去年今年  
ねんごろに閻魔も拝む初詣  
初春や奪衣婆も頬ゆるびをり  
寺の池冬の鯉寄るひとところ  
蠟梅や宝登山行の乗合馬車

三重

長崎 桂子

新年

掛声の増える日日なり去年今年  
不自由が又一つ増え初日の出  
喜怒哀楽幾多越え米寿初春  
大寒や馨しき花に癒さるる  
大福茶押し戴くや令和二年



福祿寿

東京

森 なほ子

小晦日爪剪つてゐて旅心  
街なかに「ひめゆり」の文字那覇冬天  
初詣締めは近くの社にて  
御稻荷ののぼり滴る寒の雨  
梅早し祖父似と思ふ福祿寿

東京

赤座 典子

氷見

雪吊の縄軽きまま立ち並ぶ  
十キロの寒鰯並ぶ番屋街  
里山に三室の宿煖炉の夜  
立春の朝コーヒーと杵の豆  
若緑藤井七段運動靴

埼玉

秋川 泉

初詣

初詣地元の寺が同窓会  
初詣祢宜にまとはる吾子ふたり  
初春やバラ色のほほルノアール  
傾きが大きく坐する林檎かな  
神仏に雑煮そなふる夜明けかな

佐藤 恭子

襲

春の月雲を襲と着給うて  
蓮の葉にパンの撒くをとこ雀の子  
鐘の音に風巻き起こる蓮かな  
明るくてくらくて水槽のいわし  
むくどりの花踏みしめて歩くかな



心中のかたはれのごと冬至風呂 佐藤 喜孝

立ち読みにふけりてのちの夕時雨 秋川 泉

パイプオルガン風の音立て聖夜かな 大日向幸江

木枯の抜け道にありステンション 七郎衛吉保

冬の霧水門に船はまりさう 篠田 純子

寒夕焼うそつくときの笑顔かな 篠田 大佳

冬菜青くひとりの日々のある日茹づ 定梶じょう



新橋の旧停車場の冬木立 須賀 敏子

どの道も紅山茶花の散つてをり 田中 藤穂

寄鍋や舌鼓して明日の備へ 長崎 桂子

冬霞挽茶羊羹色の河 森 なほ子

しあわせを説く人の行く冬の街 赤座 典子

初詣坂をころがる京訛 佐藤 恭子

喜孝 抄



鴈の棹鋭角にして海わたる

佐藤喜孝

渡り鳥は、何千・何万キロと地球上を飛行し、毎年同じ場所へ帰り着く。本当に自然の驚異です。鴈の飛行に実際に遭遇し、その貴重な経験はたくさん句となり、鴈が鋭角を作り、海を渡っていくという、素晴らしい光景を詠まれました。あの鋭角の先頭の鴈は、リーダーなのかと思つていましたが、一番強い風を受ける位置なので、疲れたら交代するそうです。それにしても一度見たいものです。鴈のV字飛行。(典子)

丸顔の猫従いて来る小春かな

大日向幸江

猫の顔かたちには、西洋種は逆三角形が多く、日本では丸顔が多く見られるそうです。日本猫は全体の形も丸みを帯び、性格も穏やかで、海外でも人気があるそうです。そんな愛くるしい猫がついて来たりしたら、つい一緒に歩いてしまいますよね。小春日のほんわかとした一時のことでした。

(典子)

時雨忌や黒羽城址に曾良思ふ

須賀敏子

先日新聞に「黒羽芭蕉の里全国俳句大会」の案内が掲載されていました。芭蕉が「奥の細道」の旅行中に、十四日間も滞在したという黒羽(現栃木県大田黒市)の地で、作者は、芭蕉に随伴した河合曾良に思いを馳せておられます。広辞苑には「常に師を助け、その愛重を受けた」とあります。作者の思いとは、どのようなものだったのでしょうか。(典子)

木枯や面打つ家の灯のともる

田中藤穂

能面を制作している家を目にすることが出来たのは、おそらくは作者の記憶の中にある、情景ではないでしょうか。昔は家内工業のような形で、物作りがされているのが、よく見られました。子供の頃の我が家の裏にも、浮世絵を刷っている老夫婦の家がありました。沢山の版木が壁に立てかけられているのが珍しく、よく遊びに行つたものです。作者も般若、小面などの面を打つ作業を、目の当たりに出来たのでしょうか。(典子)

小さきカフェここにも在りぬ小六月

森なほ子

私の住んでいる街にも、散歩の途中に一休みしたいようなカフェが、何軒ありました。今はよく行つた二軒とも無くなってしまいました。ケーキもおいしかったのに。この句のように「ここにも」と発見できるような、小さなカフェが欲しいです。小春日に、ほっこりと一時を過ごせるような…………。(典子)



## 秋深しルールの変はるおにごっこ

篠田大佳

ゲーム機もスマホもなかった時代の遊びが、変わらないままであるというのは、無理なのかもしれません。今どきの「鬼ごっこ」を見る機会があった作者。自分たちの遊んだ「鬼ごっこ」との違いに、違和感というのではなく、ある種の感慨があつて、秋深しと詠まれたのでしょうか。昭和生まれには、びっくりするほどの変わり様だつたりして。(典子)

## まなじりのみゆるがごとし鷹の列

佐藤喜孝

作者は一月号に鷹で十句読んでいる。愛蔵本には五十二句あり、その作者は芭蕉・去来・一茶・子規・漱石・素十・信子・多佳子・草田男・汀女・誓子・敦・登四郎・波郷・八束・嘉代子など、一流の？錚々たる？名の知れた？俳人と思われる句が掲載されている。もしかすると彼等と同等の、あるいは仲間入りには「鷹」は必須の季語なのかと、考えてみたりして楽しんだ。(吉保)

## 秋澄めり秋篠寺に伎芸天

秋川 泉

当たり前のことではあるが、「世の中には自分の知らないことがいかに多いか」と、俳句を始めから一層その感を強くしている。Wikipediaで調べてみる。秋篠寺は、奈良市郊外に八世紀ごろ創建された寺院で、鎌倉時代に再建された本堂は、国宝に指定されている。祀られている伎芸天は、

仏教守護の天女の一つで、器楽の技量が優れていたことから、伎芸修達・福徳円満の護法善神とあつた。俳句に感謝。(吉保)

## チンドン屋の聖者の行進年の暮

篠田純子

子供の頃の我が家は、父が病弱だったこともあり、賄い付きの下宿人を置き、生活の糧としていた。価格の安い食材調達のため、遠くの市場まで出かけ、母の荷物運びの手伝いをした。市場では毎日のようにチンドン屋が出て、その日の安売り品のビラを配り、客を呼び込んでいた。クラリネットの奏でる曲は、何故かうら寂し気なメロディーの、「天然の美」だった記憶がある。(吉保)

## 信号の赤の点滅日が短か

定樞じょう

我が家から、志木街道を所沢方面に、車で五分程走ったところに、五差路が二つ重なったような、変形交差点がある。交差する全ての道に、信号機が付いている。その数は優に二十を超える。道すがらこれらが見通せるポイントがあり、それは「日本珍百景」に相応しいような風景となる。短日期になると、信号の色は一層鮮やかになり、ランダムに点滅する様に、見惚れそうになる。(吉保)

## 暮の秋白き番は宙を切る

長崎桂子

秋になつて宙を切る白い鳥とは、何がいるのだろうか。カモメ？白鷺？鶴？白鳥？作者はそれが、番で飛んでいると詠んでいる。とするならば、それは白鳥だろうか。シベリアやオホーツク海沿岸で繁殖し、晩秋から初冬にかけて日本に渡来し、春に飛去する。寿命は二十年程とあるが、カップル、すなわち番となつた白鳥は、一生添い遂げるとあるので、やはり白鳥だろう。(吉保)

### 父と娘のしりとり速し冬萌ゆる

赤座典子

この父娘は時間があるといつもしりとりをしてゐる。馴れてゐるからリンゴから始まり流れるやうに進んでゆく。端から見てゐる作者はあらあらと云ふばかり。幸せはこんなところにある。(喜孝)

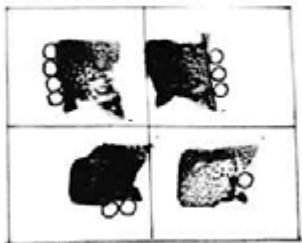
### 秋澄むや狩行見下ろす摩天楼

七郎衛門吉保

作者は昨年ニューヨークに行かれた。さうかこれがあの句の生まれた所かとその場にゐたのであらう。「狩行見下ろす」は「狩行が見下ろす」である。間違つても「狩行を見下ろす」ではない。七郎衛門吉保さんはここでどんな光景を詠まれたのであらうか。(喜孝)



佐藤喜孝



大日向幸江

ひとときの賑はひ去りて七日粥  
福寿草サルの家族の寄り添ひて  
一口をしっかり噛みし雑煮餅

◎人日の頃には子供や孫たちもそれぞれの家庭に戻り、作者も元の生活に戻る。「ひとときの」はホトするよりはさびしい言葉だ。

◎作者らしい発想。この福寿草は鉢植ではない。陽だまりに福寿草が群生してゐる。花をつけたものやまだ蕾の背の低いものをサルの親子と見立てた句。猿をなぜカタカナにしたのか首を捻った。◎いのちの噛みしめである。下五「雑煮かな」もある。

越中路 雪吊の三角 溢る

冬涛のなく音消える氷見の海  
雪や風無く屋敷林無沙汰かな

◎さう云はれば縄と枝で三角を作っている。目のつけどころが面白い。調べを整へて「雪吊の三角溢る越中路」。

◎「なく」は漢字にすると「無く」なのか「鳴く」なのか判断に迷ふ。「消える」とあるので「無く」は無いと判断した。しかし氷見に不案内なわたしには情景が浮かんで来なかった。

◎作者の意図を読み取れたか不安である。そこで「無沙汰」を手持ち無沙汰の「無沙汰」として読んだ。作者一流の見方である。投句に（越中路旅より）と前書あり。必要ないかとおもふ。

去年今年トランプといふ大統領

願ひごと一つと決めて福詣

針起こし丸く小さな鍋掴み

◎俳句にはかういふ表現がある。右左を読者に任せると云ふ大らかな表現。世の中みな同じ考へではないので好きか嫌いか、好いか悪いかはつきりさせたい。わたしがせっかちなのだらう。

◎面白いことを云ふ。願ひ事が沢山あつて選ぶのに苦勞をする。やっと一つに決めてきて福詣に。犠牲になつた他の願ひ事のためにも叶つて欲しいと願ひました。

◎見慣れぬ季語と思ひ歳時記を。角川歳時記にあつた。「縫初」の謂だと理解。日頃歳時記を活用されてゐる作者の姿勢が解る。吉保さんの処でも書いたが、送り仮名一つで道が分かれてしまふのが俳句。付度しなさ過ぎと批判されればその通りだが、「掴み」とみを送ることで小さな鍋を掴むとも読めてしまふ。みを送らなければ付度に期待しなくとも済む。わたしはこの鍋掴をプレゼントされた。かわいらしく台所道具の仲間入りをしてゐる。

東西のアルプス晴や針起し 金田 秋紫

ちりめんのお手玉五つ針起し 三橋 玲子

花溢れニユーイヤーカーンサート開演

黄梅の咲いてゐるかとか角曲る

お茶の花好みし人のもう住まず

◎新年を迎へる喜びは洋の東西を問はず同じ。「花溢れ」でまことによき新年だ。今はテレビ中継があるらしい。わたしは小沢征爾のCDをよく聴いた。

◎わたしも冬桜、樗の花、変わったところでは烏瓜の花と季節になると道が変わる。作者もうきうきして角を曲がったことだらう。

◎お茶の花はアウト。これは句会の仲間には教はった。「茶の花を好みし人のもう住まず」。薔薇の花と違ひ茶の花の好きな人は人ながら偲ばれる。

#### 長崎 桂子

自生の南天の実に病みし日思ふ

早朝は背を丸め行く寒卵

黄色味を帯びた障子に今落暉

◎過去に大病なされたやうな氣息のある句だ。闘病の日々、きつとこの南天に励まされたのだらう。リズムを整えて「病みし日を思ふ自生の実南天」

◎早朝、勤めか学校に急ぐ人。寒卵が早朝の寒さをうかがはせ、また元気に過ごしてといふ願ひが込められてゐる。「寒卵」が重要な働きをした一句。

◎光景のよく伝はる句だ。が「黄色味」が日常語すぎる。とりあへず「金箔を帯びたる障子落暉かな」。「帯びた障子に」を「帯びたる障子」とすると句にキレが生じ広がりが生れる。

大自然は粹なことをする。

#### 森 なほ子

稲荷からとらやカフェへと女正月

初参り賢しく恐く狢狐

一月や虎屋商標受話器四つ

◎人生謳歌、女性謳歌をされてゐる。わたしのやうな者には稲荷もとらやカフェも如何いふ所か分からない。豚に真珠と云ふことか。でも愉しまれてゐるのは十二分に分る。

◎前句の稲荷神社のお狐さん。賢しくといふ感じ方は個性的で納得。

◎軽妙な句。商標が記憶にないので虎屋のホームページに行ってきた。見て笑った。昔の桐筆筒についてゐる吊環のやうでもあり、また確かに黒電話の受話器とも見える。「虎屋商標受話器四つでお正月」。

本堂の緊と冷たき畳かな  
空の青も冬椿の紅も濃かりけり  
鰯網に海鳥の列置灯台

◎緊は「しん」と読む。例に「寒さがしんと身にこたへると」使ふと知る。読後「緊」一字が核になり正にこの句を支へてゐる。ご本尊の前の畳をしまった主に読んだ意欲作。

◎もを二回も使ひ、色も青・紅と二色も使ひ、濃かりけりと、少し濃過ぎた句になってしまった。

◎作者に

長江の置灯台も初冬かな

といふ佳句がある。二〇〇一年一月号に発表されている。今回の句は国内産。鰯漁の賑ひを海鳥が囃してゐる。置灯台が脇役としてしっかり句を締める。

修正会の護摩の炎の高くあり  
修正会の大般若経苦厄消す  
修正会や法力無限ひろがれり

◎修正会は「しゅしゃうゑ」と読む。新年の季語。広辞苑によれば、「元日から三日間あるいは七日間、国家の隆昌を祈る法会。日本では七六七年に始まるという」。句意明瞭、格調高く力強い作品である。現今のコロナウイルスもこの法力無限で焼き滅ぼしたい。

こひすてふ

田中藤穂

お正月になると知合いの上野さんの家からお呼びがかかる。その家も子供五人、わが家も兄弟五人、それに又友達など入ると随分大勢になる。目的は百人一首。あちらのお兄さんは二人早大生だったから小学生の私など邪魔だったかも。でも大勢でわいわいがやがや。今思い出しても楽しい一時だった。「こひすてふ……」などの和歌の意味など知る由もない純真な小学生でした。



中川句寿夫さんをしのんで 八

蓮の実が飛んで和服の父のこと  
 またの名を妻が知りゐて夕化粧  
 釘箱の中の折り尺昭和の日  
 吸ひ呑みがころがつてゐるはたた神  
 畦焼いてその日の匂ひ妻にあり  
 身ぐるみの体重測定桃の花  
 雁渡る頃の虚空や禅の里  
 桶の箍弛んでをりぬ鯰起し  
 新松子天馬に轡鞍もなし  
 梅漬けの種が大粒敗戦日



朝日新聞俳壇で、  
 恩田侑布子が森澄雄の  
 残した「本当の俳句  
 は、物を見たとき言葉  
 のないところから発想  
 が生まれてこなければ  
 ならない」を書いてい  
 る。私はこれを言葉の  
 飛躍と受け取った。私  
 の句作に最も欠ける部  
 分である。「ここのも  
 ん」が年代順に編まれ  
 ているとすると、前半  
 の句にはこのことが多  
 くあり、年齢と共に減  
 少しているのではが、  
 読後感である。そこで  
 最終頁より遡って「飛  
 躍」してると思う句を  
 十句選句した。

七郎衛門吉保 抄

古文

長崎桂子

高校の古文の授業で百人一首を知りすつ  
 かり魅了されました。何度も読み耽って居て、  
 日本の四季を優美さ華やかさに繊細な情緒の  
 豊かな歌が多く、憧れる気持ちは、増すばか  
 りでした。そして学生で居た間は短歌を詠む  
 日々に熱中していました。



村雨の

秋川 泉

子どもの頃お正月ばかりでなく冬は家  
 族で百人一首で遊んだ。母は、寂蓮法師の  
 「村雨の露もまだひぬ真木の葉に霧立ちの  
 ぼる秋の夕暮れ」がおはこで、誰にも取ら  
 れてはならぬと意気込んでいた。なつかし  
 い思い出だ。私が親になってからは子供の  
 小・中学校時代『百人一首かるた大会』が  
 一月にあった。今はすっかり百人一首から  
 遠ざかり、句を詠みしみじみと素晴らしい  
 と感じている。

はにかむ

はにかめる乙女の如し合歡の花  
古希にして雛を購ひはにかめり  
うす黄色のすこしはにかむ香雪蘭  
眞實ははにかみがちに竹婦人

埴輪

百千鳥埴輪は舌を捜しゐる  
口開けて汗の球児の埴輪めく  
口開けて黙の埴輪や春の昼  
小春日の埴輪の顔の呆けをり

羽・羽根

爽籟や羽を廻して発電す  
雀の子羽の浄らに遊びゐる  
かち鳥犀の後瀬に羽いちまい  
ジャケツトを脱ぐやこぼるる鳥の羽  
もの充ちて何の虚しさ羽根ぶとん  
身籠りし夢から覚めた羽根蒲団  
春陰や鶴の羽撃く葉包紙  
とぶ蝶の羽のうすくて苗田病む  
にほどりの羽を振ひてよちよちと  
風を切る羽根づかひして初つばめ  
春の日のしろい羽根とぶ土の面  
てすさびの折鶴の羽朧月

鎌倉喜久恵

長崎 桂子

佐藤 喜孝

佐藤 喜孝

篠田 純子

井上 石動

大日向幸江

篠田 純子

田中 藤穂

佐藤 恭子

竹内 弘子

田中 藤穂

斉藤 裕子

佐藤 恭子

渡邊 友七

芝 尚子

鈴木多枝子

佐藤 恭子

芝 尚子

翡翠の青き羽欲る母も子も

隅田川鷗も花に羽休め

鳩の子の日毎色づく羽のいろ

隈笹にかくれるやうに鶴の羽根

初空に鳥の羽の舞ふ時刻

凍蝶の氣息わづかに羽動く

梅雨の蝶羽ゆるやかに地に降りぬ

夏の蝶小さき水に羽たむ

海の日電気をつくる羽根やさし

小春日や羽根なき我は杖を持ち

羽くろき川鵜水面を切つてとぶ

何鳥か羽根一枚を梅雨の庭

初夏や鶯の羽のさしわたし

羽閉ぢて地をゆらゆらと冬の蝶

地に伏して羽もそぼろに蜂の冬

潜り来て干す鶴の羽根が重たさう

羽くろき川鵜水面を切つてとぶ

コスモスのリズムに合せ蝶の羽

羽づくろふとき脚朱き雄の鴨

長き間を羽繕へり水の秋

羽田

蛭袋ひかりの湧いてゐる羽田

羽田沖くらし蝦蛄漁ひきつぎて

田中 藤穂

斉藤 裕子

篠田 純子

佐藤 恭子

佐藤 恭子

鎌倉喜久恵

鎌倉喜久恵

鎌倉喜久恵

篠田 純子

芝 尚子

竹内 弘子

竹内 弘子

森山のりこ

竹内 弘子

山荘 慶子

鎌倉喜久恵

定梶じよう

竹内 弘子

渡邊 京子

竹内 弘子

篠田 純子

竹内 弘子

羽箒

紅鴉の羽箒軽ろく夏点前

廂間

どくだみの花廂間を埋め居り

ピアノ

冬うららいなせピアスの植木職  
緑蔭に片方落ちてゐるピアス  
片耳にピアス八個やアロハシャツ  
春めくや臍のピアスの煌煌と

ピアノ

木の葉散る手のヒラヒラとピアノ鳴る  
子供部屋ピアノの跡に冬日差  
日の落ちてサルビアの影なかりけり  
黄ばみたるピアノ鍵盤花月夜  
暑き夜ピアノの音の耳に付く  
今年竹そよぎて古きピアノ在り  
冷房やピアノの一部日がさして  
たどたどしピアノの調べ梅雨じめり  
木枯やピアノの音と協調し  
近頃はピアノ聞えず柿の家  
冬ぬくしピアノに合はせチューニング  
漆黒へ蛾が落つグランドピアノかな  
為残したこと

芝 尚子

芝 尚子

芝 尚子

赤座 典子

定梶じよう

鎌倉喜久恵

大日向幸江

関口 ゆき

早崎 泰江

赤座 典子

田中 藤穂

長崎 桂子

田中 藤穂

定梶じよう

森山のりこ

長崎 桂子

田中 藤穂

田中 藤穂

篠田 純子

定梶じよう

チンドン屋ピアノ初戀富士登山

佐藤 喜孝

調律のピアノポロロン冬董

大日向幸江

夏きざす十二才のピアノ力満ち

須賀 敏子

夏菜莢のかすかな甘さピアノバー

秋川 泉

テラテラとグランドピアノ冬埃

大日向幸江

爽やかやピアノ囁き高鳴りて

長崎 桂子

微かなるピアノの音色小春かな

須賀 敏子

鼯鼠

微恙あり鼯鼠相撲が初日だす

竹内 弘子

博多場所鼯鼠の力士引退す

須賀 敏子

身鼯鼠の校歌流れる夏の空

森山のりこ

初場所やご鼯鼠綱をとり逃す

木村茂登子

びい玉

びい玉はぬれやすきもの春の暮

佐藤 喜孝

びい玉に夕日こもりぬ遠き代に

佐藤 喜孝

ビートルズ

濡縁に白菜を干しビートルズ

竹内 弘子

ビードロ

ビル嵐紅ビードロの位置を変ふ

佐藤 恭子

ビーナス

縄文のビーナスに会ふ巴里祭

赤座 典子

火打

紅葉の火打山より日本海

須賀 敏子

## あとがき

### コロナウイルス

コロナウイルスで集まること叶はず句会も休会、何時までつづくか今のところ判然としない。そんな時通信句会をしてはと提案をいただいた。親切なことに全てなさってくださいとのこと。篠田純子・篠田大佳お二人にお礼を申し上げます。まことに迅速丁寧に事が運び成果を上げて参加者に作品集が届けられた。寸評を書いたが、句会だと話したことも作者が分ればフォローが出来るが、通信句会は書きつきり。緊張する。会はなくとも皆様のご健吟の様子が知れその上佳句の誕生に立ち会ふことが出来た。

### 私事

ある日起きたら横になっても坐っても寝ても片方の背中に鈍痛。初めてのことではびっくりした。よく効く貼薬があるので苦労して貼ったが後ろに手が回らず皺になったやうだ。結局夕方整体に行く羽目になった。パソコンのやり過ぎか、姿勢の悪さである。そこで考へいまはタブレットで並行入力してゐる。タブレットのよい所は左手の一本指で出来右手を休ませてゐる。予測でワードが出てきてタッチ回数が思ひの外少なく

てすむ。布団の中でもできるので都合がよい。弱点は旧仮名が打ちにくい。辞書登録が出来ないところかな。そこで最後はパソコンで校正かたがた修正する。これで気分が大分楽になった。(喜孝)

### 御厚志多謝

大山 夏子様

### 新会員ご紹介

埼玉県川口市

吉津睦子様

二〇二十年三月号

発行日

三月三十日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ  
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

ゆうちょ銀行(普)

(店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)